

日々難儀し、創意工夫する 酪農家の生きざまこそがいのちの教材



酪農体験学習に先立ち子どもたちに思いを語る

ゲスト／尾場瀬 優一さん

鹿児島県・志布志市立香月小学校校長
酪農教育ファーム推進委員会九州地区委員長

酪農家の生きざまに感動し、酪農家の応援団を自認する尾場瀬優一さん(58)。教育者の立場から、酪農体験学習を通して子どもたちに生きること、いのちの大切さを教え続ける。酪農教育ファーム活動の制度立ち上げ当初から携わってきた尾場瀬さんに、ときに辛口批評を交え活動への提言を語ってもらった。

った」と子どもが感じる事が大切。自分が行ったことが良かったと感じられるまで、とことん付き合わせる事が大事ではないでしょうか。

搾乳体験が定番メニューになっていますが、何が何でも搾乳をさせる必要はないと思うんです。僕たちの調査結果を見ると、体験メニューで子どもたちに最も効果があるのはブラッシングです。酪農家が「ブラッシングをすると牛は喜ぶんだよ。耳が垂れて、目がとろーんとして、尻尾が垂れていくんだよ。これは牛が喜んでる姿だから、そうなるように頑張ろうね」と、呼び掛けてからブラッシングをさせます。一生懸命ブラッシングしていくと牛が喜ぶ姿が子どもにも見えてきて、自分が頑張れば相手が喜んでくれることを知る。牛舎の掃除も同じです。その酪農家が一番してほしいことを子どもにさせ、子どもがその価値を感じるようにするといいいでしょう。何も酪農家が特別な無理をすることは無いと思いますよ。

人は悪戦苦闘しつつ、 より良い生活を求めている

一命の大切さ、食への関心の高まりなどから牛との触れ合いを通じた酪農教育ファーム活動の教育効果が注目されています。一方、酪農家の応援団を自認される尾場瀬先生は、酪農家の生きざまそのものに着目されていますね。

尾場瀬 僕たち教師が子どもたちに教えることは生きること、いのちの大切さです。酪農家は日々難儀し苦勞しながら創意工夫を凝らし必死になって生きています。子どもたちが成長し、やがて何らかの職に就き、何か困ったときに「あのおじちゃん(酪農家)もそうだった。でも頑張っていたよな。俺も頑張らなくちゃ」と思うようになってくれたら、それが最高の教育であり成果ですよ。人はみんな悪戦苦闘しながら、より良い生活を求めて生きてることを子どもたちが知ってくれたら、それで十分だと思っています。鹿児島はサツマイモが特産ですが、サツマイモ農家から学ぼうとすると、春先から収穫の喜びに至るまで相当の期間を費やします。一方酪農は、一日の中でつらい仕事があり喜びがあるじゃないですか。だから酪農体験は教材として最適です。教材は牧場でもなく牛でもない、酪農家そのものなのです。一日一日を必死になり生きてる酪農家の本音を聞くことが子どもたちにとって一番大切です。酪農家の皆さんにはつらかったこと、うれしかったこと、工夫していることなどの全てを自分の言葉で語っていただきたい、そう願っています。

酪農を教育活動の柱として取り組むきっかけは1995年、鹿児島市喜入町の「きれい牧場」を運営されている鎮守嘉治さん、喜代美さんと出会ったことでした。鎮守さんと知り合い、この人たち酪農家の思

いを子どもたちに伝えるべきだと思ったのです。そして僕は酪農家の応援団となったのです。

相手の喜びを知ること、 自分に価値あることを知る

一食育を含めた生きること、いのちの大切さを子どもたちに伝えることが教育の基本であり、酪農体験を通して教えていきたいということですね。

尾場瀬 もう一つ大事なことは、子どもが牛に関わった結果、牛が喜んでることを見だして、自分にも価値があることを知ることです。この自己有用観を得ることが大切でしょう。さらにもっとシンプルに牛に触れて心が和む、いろいろなことを忘れてただ単に楽しいひと時を過ごす—それだけでもいいのかなとも思っています。

そう考えると、搾乳(手搾り)、ブラッシング、餌やり—ベルトコンベア式に一連のメニューを体験させるのではなく、一つの作業であっても時間をかけて子どもたちが満足するまで、達成感を感じるまでやらせることも一方法かもしれません。例えば牛舎の掃除なら、きれいになるまで徹底的に掃除させることです。自分が汚れようが、時間がかかろうがね。そして酪農家は「牛さんが喜んでるよ、ありがとうね」と言ってあげる。「きれいになった。俺は頑張

酪農家と教師がセットで 教育を進めていく

—活動がほぼ10年経過して、制度的にも充実してきました。半面、活動に参加している酪農家とそうでない酪農家の距離が離れているようにも受け止められます。その点、尾場瀬先生は現状に苦言を呈しているとも聞きます。

尾場瀬 中央酪農会議が中心となり酪農教育ファームという名の下で認証制度ができ、さらにファシリテーターという制度もできました。制度が充実するのは結構ですが、何が何でも酪農家を教育者にしようとするのには疑問です。あるいは、一酪農家が私たちはリーダーだと傲慢(ごうまん)になることも疑問です。酪農家は酪農家であ

酪農教育ファームの学習に生かせる書籍リスト

日本酪農教育ファーム研究会

ジャンル	題名	著者など	発行	対象	紹介文	学習の場面
児童文学	忘れないよ、リトルジョッシュ	作：マイケル・モーパーゴ 訳：渋谷弘子	文研出版	小学校中学年以上	イギリスのデヴォン州の農場が舞台のフィクション。3人家族の13歳の少女の日記になっている。少女と動物の触れ合いを中心に、地域の牧場や少女の家族と、2003年にイギリスで流行した口蹄疫との壮絶な闘いが描かれている	・読み聞かせ ・口蹄疫を扱った授業
ノンフィクション	畜産市長の口蹄疫130日の闘い	著：橋田和実 (宮崎県西都市長)	書肆侃侃房	小学校高学年以上	畜産市長の異名を持つ宮崎県西都市の橋田和実市長が口蹄疫と向き合った真実の記録	・口蹄疫を扱った授業
ノンフィクション	私の牛がハンバーガーになるまで	著：ピーター・ローベンハイム	日本教文社	小学校高学年以上	牛肉と食文化をめぐる、ある真実の物語	・牛の一生 ・食卓に届くまで
絵本・ルポルタージュ	いのちをいただく	作：内田美智子 監修：佐藤剛史	西日本新聞社	読み聞かせ 可能年齢から	助産婦である作者が、ある小学校の食肉加工センターで働く人の話を聞いて感動し、話の内容を絵本としてまとめたもの。絵本部分の他にさまざまないのちの職に携わる人たちの話も文と写真で紹介されている	・読み聞かせ ・食べることに関する授業 ・牛の学習の中で



広げよう！酪農教育ファーム活動②

ってほしいし、教育者でなくていいはずで。雄弁でなくてもぼそぼそでも自分の言葉で自分の思いを語っていただきたい。酪農家の思いを上手にくみ上げて教育するのは教師の仕事。酪農家と教師がセットになり教育していく—これでいいのではないのでしょうか。このようなことを言い続けているから、煙たがられてもいるんですよ。

僕は酪農体験の前に子どもたちに必ず言うことがあります。「牛は臆病な動物だから、人が牛舎に入ってくるとストレスを感じて乳量が減るんだよ。人は病原菌を持っている可能性があるから牧場にとっても牛にとっても怖いんだよ。大きなリスクを背負っているのに、なぜ酪農家は君たちに体験活動をさせたいのだろう、何を伝えたいのだろう」。そして体験学習の最後に「酪農家は君たちに何を伝えたいのだろうね」と聞くのです。そこが大事で、酪農家が教育する必要はないと思っています。酪農家が自ら教育者になりたい、もっと上手に語れるようになろうと努力するのは構いませんが、制度の中に組み込むのはいかなものかと思います。そして教育ファーム活動で経済的にもうけようなどは決して思ってほしくないですね。結果としてもうかるのは全く構いませんが、基本的なスタンスの問題です。

全国の酪農家戸数約2万戸に対して酪農教育ファームに参加している酪農家は300戸ほどです。このギャップを何としても埋めたいが、制度で活動を縛るようであればギャップは埋まらないでしょう。

種子島の南種子町立中平小学校の校長をしていたとき、「わくわくモーモースクール」を企画したことがありました。九州の認証牧場の人たち全員(19人)が島に来てくれることになったのですが、牛を運んでくることができません。種子島は酪農が盛んですから地元の牛を借りよう、となり島内の酪農家をお願いしましたが、最初は「そんなことをして何になる」と全く理解してもらえませんでした。何度も足を運びやっと牛を用意してくれることになり開催にこぎ着けました。牛の提供に携わった酪農家3人が僕らの活動を最初から最後まで見ていました。閉会式でこの人たちにマイクを向けたところ、一人がマイクを握り語り始めました。「おじちゃんね、一番汚くて一番嫌な仕事を我慢してやっていると自分で思っていた。今日、その仕事に誇りを持ってやっている人がいることに気が付いた。おじちゃんも明日から誇りを持って仕事に頑張る。牛さんのために牛舎をきれいにする」と。うれしかった、やった！と思いましたね。

その牧場とは今もお付き合いをしています。認証牧場ではありませんが、写生や牛の世話をしに中平小学校の子どもたちが牧場に行っています。こういう関係をつくっていきたいんですよ、僕は。全国2万戸の

酪農家みんなが認証牧場にならなくてもいいが、少なくとも応援団にはなってほしい。そう思っています。

酪農家の応援団の後継者づくりに力注ぐ

—酪農体験活動が子どもの教育に大変有効なのですね。でも、なかなかその輪は広がりがありません。教育側の問題はありますか。

尾場瀬 多くの人が価値を知らないからですよ。ではどうするか。九州では年3回、あちこちの牧場で「教師のための酪農体験学習会」を行っています。できるだけ家族連れで参加するようにお願いしています。わが子がいれば変化が手に取るように分かりますからね。もう15年以上続いていますから、この間、参加者はかなりの数に上ります。さらに鹿児島県では総合教育センターが毎年一回、きれいな牧場を使って、教師対象の「命の教育」の講座を開いています。このように九州は頑張っています。

先に紹介した種子島の小学校、その後の黒島の小中学校、そして現在の志布志の小学校と、僕が赴任した学校では必ず修

学旅行に酪農体験を組み込んでいます。それは僕が校長だからできることなのです。教師が、いくら酪農体験に教育価値があるといっても、校長がノーといえればそれで終わりです。酪農教育ファーム活動の会場で東京に出向いた折り「なぜ、各地で活動が広がらないのでしょうか」と聞かれたことがあります。僕は「私がおその職にありますが、校長のせいだと思います」と答えました。校長が価値を認知しない、学校経営を波風立てずに事故なく無難に済まそうと思つたら実現しません。

今の僕の仕事の一つは将来の管理職になり得る人材に酪農体験活動の価値を伝えること、すなわち後継者づくりです。そして行政に対して酪農体験の価値を知らしめるための科学的なデータの収集です。これが僕にできる酪農家の応援団としての仕事です。

【聞き手/西本 幸雄】



プロフィール

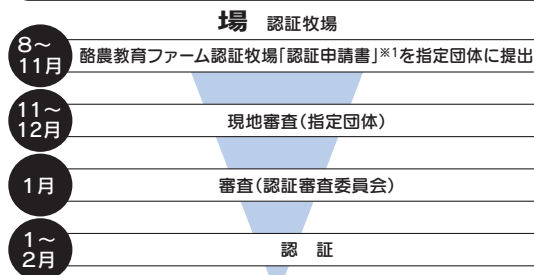
おばせ ゆういち

1954年生まれ、鹿児島県出身。77年鹿児島大学教育学部卒業。同年志布志町立(当時)香月小学校に赴任、86年鹿児島大学教育学部附属小学校教員、2003年南種子町立中平小学校校長、07年三島村立片泊小中学校校長、10年から現職。1998年酪農教育ファーム推進委員会専門委員に就任し、現在は酪農教育ファーム推進委員会九州地区委員長を務める

酪農教育ファーム推進委員会九州地区が作成した冊子「酪農体験学習のすすめ」に、尾場瀬先生の酪農教育ファームへの思いがつつられています。

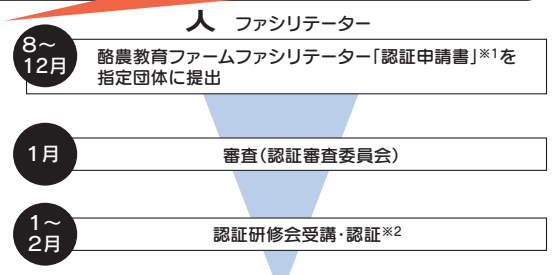
言葉で教えてもらったことは忘れやすいものです。自分で学んだことはなかなか忘れません。感動とともに学んだことはなおさらです。子どもに教える前に子どもに問うて、まずは考えさせてください。そしてできれば子どもに体験を通して発見させてください。子どもの問いかけにもすぐに答えるのではなく、ほかの子どもにも問いを広げてください。みんなはどう思いますか、と。子どもの問いに全部答えることができなくてもよいのです。本当はどうなのだろうと首をかしげ、おじさんも調べるからと、素直に答えればよいのです。問いを大きくすることも大切な学びなのです。子どもはやがて答えを見いだします。大切なことはあなたの本当の気持ち、思い、願いを、そして苦しみを伝えることなのです。人はみなさまざまな思いを抱えて頑張っているのです。それを知った子どもはつらくても、へこたれず生き続けるはずですから。命や生きることを語ってあげましょう。子どもに 一つ いのちの種をまきましょう。【尾場瀬 優一】

酪農教育ファームの認証(平成24年度スケジュール)



酪農教育ファーム認証牧場

ポイント:二つの要素で成立



酪農教育ファームファシリテーター

*1 認証牧場、ファシリテーターの「認証申請書」は(社)中央酪農会議のホームページからダウンロードできます

*2 認証研修会の受講費用・宿泊費(1日目)については、(社)中央酪農会議が負担します

認証研修会(予定)	会場	日程
— 1泊2日 —	札幌	平成25年1月22~23日
	東京	平成25年1月31日~2月1日
	大阪	平成25年2月13~14日

認証制度に関して詳しく知りたい方は、(社)中央酪農会議(酪農教育ファーム推進委員会)にお問い合わせください。

(社)中央酪農会議 〒101-0047 東京都千代田区内神田1丁目1番12号 コープビル9階
Tel(03)3219-2624 Fax(03)3219-2622
http://dairy.co.jp/edf